ア仏教という視点からの日本仏教の位置づけを含む広大な範囲が取り上げられており、実践法としても禅だけなく、密教、念仏なども論じられている。

それらについて、近年の研究を踏まえたうえで従来の説が批判され、しかもその資料として第Ⅱ部で紹介されている『中世禅籍叢刊』全一二巻＋別巻（臨川書店）が刊行されている。

中世の仏教に関心のある若手研究者は、本書を読めば、論じられるべきテーマ、参照すべき先行研究、テキストの所在を知ることができる。

評者が若い頃、日本文学に関してだが、重要なテキストについて、取り上げるべき研究テーマ、先行研究などを一冊で紹介する『必携』シリーズが刊行されていた（学燈社）。本書は研究を志す者にとってはまさに「必携」すべき本である。

従来の仏教理解は、日本仏教の研究者以外の間ではいまだに根強い。そういう人にとっては、『中世禅籍叢刊』の内容紹介を兼ねた本書は情報量が多すぎて、気軽に手に取ることがむずかしいかもしれない。

本書を契機とした研究のさらなる進展を期待すると同時に、より平易に概要を紹介した一般向けの本があると、多くの人に利益することになると感じた。

（中村元東方研究所専任研究員）

澤井啓一著

『伊藤仁斎――孔孟の真血脈を知る』

（ミネルヴァ書房・二〇二二年）

阿部光麿

一

伊藤仁斎（一六二七～一七〇五）の生涯、人柄やエピソードとして思い浮かぶのは、どのようなものであろうか。

市井の学者、京都の町衆、朱子学との対決、引き籠もった時期がある、その時期に交流のある人は一人だった、生涯原稿を書き直し続けた学問の人、温和ないいひと、地元の人たちと井戸さらいをした、全力で節分の豆撒きをした、子どもの為に着ていた衣服を質入れさせた赤貧の儒学者……。後半に挙げたものは、些か過剰な演出で知られる儒学者の評伝集、原念斎『先哲叢談』に出典をもつ。赤貧の逸話は教科「国語」の検定教科書にも掲載された時期があるので、研究以前の記憶に残っている方もおられようか。

一方、前半は既存の仁斎研究にもしばしば描かれる姿だが、中には仁斎の長男・東涯の「先府君古学先生行状」（『古学先生文集』。以下、それぞれ「行状」『文集』と称す）特有の描写に引

き摺られたもの、或いは先行研究をなぞるうちに思い込みが重ねられてきたものもある。

本書は、仁斎の著述のみならず、交友関係や同時代の状況を叮嚀に調査、考察し、右に挙げたような仁斎像に再検討に加えながら、その実像に迫る。中村幸彦氏、石田一良氏、三宅正彦氏ら先学の伝記的研究の蓄積の上に、新たな知見を加えるものである。構成は以下の通り。

序　章　血縁と地縁の記憶
第一章　儒学への目覚め
第二章　彷徨する仁斎
第三章　安寧から苦難の日々へ
第四章　古義学の確立
第五章　仁の実践
終　章　伊藤仁斎の誕生
参考文献／あとがき／伊藤仁斎略年譜／人名索引／事項索引

二

著者による再検討は、まず東涯「行状」の描く仁斎像に施される。東涯の執筆意図を推察しつつ、仏教を奉じる父・了室との仁斎の確執を指摘する点は新しく、母方の親族との交流についての考察も、松下町での隠棲期に外出をともなう交際があったことを示す。「行状」の描く「其の与に語る所の者は井上養白一人のみ」、近隣の人とも面識が無かったという時期は、必ずしも長くはないようである（第一章）。また、仁斎の胸中や人柄についても著述と詩歌からの検討を加える。隠棲する仁斎には、学問に専心するなかでも滲む寂寥感を捉え、安東省菴を介した朱舜水との遣り取りには、舜水が嗅ぎ取った当時の仁斎の自己顕示欲を指摘する（第一章、第二章）。号の使用時期について「仁斎」を六十代以降とし、中年期の主たる号を「誠修」とする見解は、三十代の「仁の説」（『文集』）を執筆した時期に朱子学者時代の「敬斎」から独自の「仁斎」へと転じたとする学説に改めて修正を迫る。隠棲から復帰して結成した「同志会」、後に開催した講読会についての検討も、それぞれの参加者や会場とした場所から、仁斎よりも若い世代の医者や資産家、公家たちが、彼の試みに惹かれていった様子を明らかにしている（第三章）。仁斎が生涯続ける著作の改訂も、決して孤独な探究ではなく、東涯を含む門人たちとの共同作業であったという。それが行われた古義堂を「工房」のような場と表現する点も興味深い（終章）。

本書の魅力は、叮嚀な考証の上に大胆な推測を展開し、様々な可能性を積極的に探る点にもある。一例を挙げれば、仁斎が若年寄・稲葉正休に著作を献上したことは、『語孟字義』贋刻本との関わりからよく知られるが、著者は正休と対立した老中・堀田正俊が熊沢蕃山を評価していたとされる点に注目し、蕃山、仁斎双方の交際関係を検討した上で、「仁斎にとって蕃山は避けて通れない存在だったと思われる」との見解を示す

（二六一頁）。管見の限り、仁斎の著述に蕃山を名指しする例は無く、天理大学附属天理図書館所蔵の『古学先生文稿』と称される草稿群に中江藤樹についての言及があり、そこに「其の門人も亦た大藩に仕へ、其の学ぶ所を行ふを得る者有り」（「紀談」。傍点は評者、以下同）と見えるのが、蕃山への言及と思われる唯一の記述である。そこに対抗心の類は窺い難いが、現実の社会に具体的な利沢恩恵をもたらした蕃山を意識していたとすることを起点に、かねてより議論のある仁斎独特の仁政論、許衡評価、管仲評価を読み解いていく展開は、本書ならではの刺戟をもつ。

三

一方、仁斎の若き日の著述から取り上げていく本書だが、彼の問題意識や主張の狙い、思想の独自性については深入りしない。

仁斎の初期の稿本に明代の儒学者が多く引かれることを指摘し、仁斎は朱熹その人とだけ対峙していた訳ではないと強調するのも本書の特徴なのだが、仁斎について「明代儒学との親和性はほとんど常識と言えるほどである」（二一八頁）と自明視し、初期の稿本に挙がった明儒の名が改稿を経るうちに少なくなる点を、著者は「かれらの議論が仁斎の考えのなかに入り込み、やがて溶け込むまでに馴染んで、固有名詞を示しながら議論を展開する必要性が感じられなくなったためであろう」（二二〇頁）と評する一方で、具体的な思想内容の考察では、その大半が明儒と共通する用語を指摘するにとどまる。明儒の引用が改訂を経るなかで実際に消えていく過程、或いは引かれ続ける事例の提示も難しくないと思われるが、それも示されることは無い。仁斎が陽明学と同類視されたことを取り上げても、陽明（王守仁）と同じ譬喩を用いている点を指摘するにとどまる（二〇一頁）。著者は、仁斎の朱子学との格闘を「近世東アジアの儒学が直面していた「朱陸異同」問題に仁斎も同じく取り組み、そこから両者の調停ではなく、両者のさきに進むことを模索した」（二二一頁）と捉え、二十代後半の頃の著述から、「立誠持敬の説」（『文集』）等にまで検討を加えているのであるから、仁斎が陸学や陽明学の何を評価したのか、或いは何を得たのかということについての見解は示されてよい筈である。「心」が善を志向すると考えるから陽明学に近い、経書を読む点は朱子学に近いといった整理で朱王の中間的存在と位置づけるばかりでは（二二一頁、二九九頁）、仁斎が目指した「両者のさき」、彼が構築した思想の独自性は捉えきれないのではなかろうか。

また、既述の通り古義堂を工房的な空間として捉える描写は興味深いが、仁斎歿後の版本を共同作業の成果と見做すに際して、歿後の版本ではなく仁斎生前最終の稿本（主に「林本」）に仁斎の思想を捉える研究手法を退ける点は些か乱暴であろう。書きぶりとしては「「林本」にだけ仁斎固有の思想が記されていると考えるのは当時の古義堂の実態を無視したあまりにも単

純すぎる理解だと思われる」（三三〇頁）、「版本に東涯の思想が反映されていると決めつける理由は見あたらない」（三三二頁）と限定的でもあり、仁斎歿後に修正が加えられた版本を「もはや仁斎学というよりは東涯学である」とも断じ、稿本を用いずに版本に拠った先行研究を厳しく批判する三宅氏（『京都町衆伊藤仁斎の思想形成』思文閣出版、一九八七年、引用は三二六頁、先行研究批判は序章）のような見解が念頭にあるように察せられ、こうした見解がもたらす仁斎研究の閉鎖性を打破する狙いが窺われる。だが、歿後の修正に一定の傾向を見出し、「仁義の名は虚にして、孝弟の徳は実なり」（『孟子古義』）等の直截的な表現が版本では削除されていることに着目する子安宣邦氏の指摘（『伊藤仁斎の世界』ぺりかん社、二〇〇四年、二六四頁、注37）は、稿本によってこそ仁斎に迫れるとする主張として、変わらず説得力をもつように思われる。退けるならば、こうした見解にも具体的な言及があって然るべきであろう。

著者は「『大全』といった注釈書や正史と呼ばれる歴史書の編纂では集団作業が一般的であった」（三三一頁）と言うが、評者には、まさに『大全』や正史こそが、集団作業による編纂を経る程に一つの書物としての主張が稀薄になることを示す実例のように思われる。一方、著者は『文集』所収の講義や策問を指して「古義堂に集う人々の協力をもとに仁斎が思索を紡ぎあげてきた証拠である。もちろん最終的な判断は仁斎に委ねられているものの、「孤独」というイメージとはほど遠い、むしろ「協業」とも言えるような活動が古義堂の実態であった」（三三一頁）とも言うが、これは得心すべき指摘である。やはり最終的に一人の人間が判断をして筆を入れているのか否か、それが誰であるのかは決定的な相違であり、そこに生前の稿本と、歿後の版本との差違があろう。版本しか現存しないのであれば、我々は著者の所謂「近代的な人間観」（三二九頁）では切り分けられない著作群と向き合わねばならなかった。だが、仁斎においては、生前の稿本がそこにあるのである。

なお、著者は生前の稿本の重視が、版本ならびに刊行作業の中心的役割を果たした東涯の軽視に繋がることを懸念するが、本書のように東涯の果たした役割が改めて示されることで、仁斎、東涯の研究もその懸念の先の段階へと進み得るように思われる。本書の表現に倣えば、東涯によってプロデュースされた「儒学者仁斎」（三一八頁）の著作は、版本にほかならない。それを踏まえた上で、版本の意義もまた認識されよう。

四

本書には、思い違いのように思われる箇所も認められる。全体として叮嚀な考証が示されているだけに、こうした箇所が誤解や混乱を生まないよう指摘しておきたい。

具体的には仁斎独自の性善説解釈であり、仁斎は『孟子』の性善説を「自暴」や「自棄」（『孟子』）に陥っている者たちに発した教導の為の言説であると位置づける。著者はこれを取り

上げ、「この議論〔性善説—評者注、以下同〕は千百に一、二の割合でしか存在しない「自暴自棄の者」に向けたもの」と仁斎の解釈を示した上で、この解釈によって「〔性善説は〕朱子学におけるようなすべての人間における出発点を指すのではなく、「孔孟の教え」における最終的な防衛ライン、絶望の淵に立っている人間を学問へと導くために最後に残された救済の言葉となった」と言い、その意義を示す（二九六～二九八頁）。だが、論拠とする『童子問』巻上第一五章には「自暴自棄せざる者は、百中の一二のみ」（生前最終の稿本「林本」。版本は「自暴自棄せざる者は、千百の一二のみ」に作る）とあり、本書では比率が反転してしまっている。ごく僅かな者たちに対する「救済の言葉」としたのではなく、仁斎はほぼ全ての人間を「自暴自棄の者」と見做すことによって、性善説に普遍的な教導としての役割を担わせ、絶対的な善性の具有を示す世界説明としての言説からの転換を果たしたのである。

なお、序章にも「千万人に一人の割合」で「自暴自棄」がいるとの仁斎の認識が紹介されるが（一七頁）、これも論拠として示される『童子問』巻下第一章を見れば、仁斎が極めて稀に存在すると主張しているのは「人の四端無き者」（「林本」。版本は「人にして四端無き者」に作る）、つまり例外的な四端の先天的欠落者であって「自暴自棄の者」ではない。この箇所は仁斎独自の「下愚」（『論語』）解釈として知られており、著者も承知している筈である。

ほか、本書には会沢正志斎『中庸釈義』の書名が二箇所（二四七頁、二八八頁）に混入しているが、これは会沢研究の業績もある著者ゆえの手違いかもしれない。

結

叮嚀な調査と考証を重ねた上で、積極的に様々な可能性を探り、大胆なストーリーを提示する本書だが、それを鵜呑みにすることは、著者も望むところではあるまい。現存する稿本が豊富かつ入手しづらい（現在は原本を披見できない。本誌第五一号、一六五頁参照）という特殊な資料環境ゆえに、ともすれば閉ざされた世界のようにも見えるであろう仁斎研究の場。本書はその場を開き、新たな風を呼び込む契機ともなり得よう。評者も本書に学ぶところ多い後学の一人である。右には忌憚なく所見を述べたが、本書のもたらす刺戟が新たな検討と考証を進めさせるならば、本書は仁斎の伝記的研究としての一歩であるとともに、研究史上の契機としての意義をもつこととなろう。

（武蔵高等学校中学校教諭）